

デュヴェルジェさん(Duvergé Viviane、美々庵)とのインタビュー(Ver.0)

日時: 2024 年 08 月 17 日(土) 16:00-18:30

場所: Hotel Regina at Bordeaux

参加者: Duvergé Viviane, 坂本 尚志, 鈴木 慶子, 松田 浩, 林 篤裕 (敬称略)

Q1) S2)

日本の高校生や大学の初年次生は、「まとめる」という語を使います。「論点を整理する」とか「問題を小分けにする」という概念がないからです。フランスでは、どの段階で、「論点を整理する」とか「問題を小分けにする」という概念を教えますか。

A1)

この質問は 5 つの全部の質問に関係するが、フランスにおいて「書く」という行為は早い段階から教育される。小学校からである。子供たちは小学校、中学校、高校・大学を通じて徐々に力を付けていく。それは本当にたくさんの練習によって行われる。

一方、「論点を整理する」とか「問題を小分けにする」という教育は比較的遅く学ぶことになっている。非常に重要な概念で日本における中学 2 年生、3 年生の学年、14-5 歳で学ぶ。なぜそれが重要かという、この学年の授業で行うのは「議論をする・議論を組み立てる」という段階であるからである。

ここに示した 2005 年の教科書の著者は良く知られていて成功を収めたものだが、各章において「書いてあることを描写するや、概念を抽出する」という活動が含まれている。日本で言う中学 2 年生の段階で **ユートピー** とか **エキソティーズ** の 18 世紀とか 19 世紀におけるテーマが提示され、その文章から主張や概念を抽出する訓練をしている。テキストを読んでいくわけだが、そこがどういう構造を持っているのかや、文章を分析・観察しながら読むという訓練をする。これらを通して書くということを学んでいく。ここで重要なのはいろいろな「議論をしているテキストを読むこと」を通して体得していくことである。

「問題を小分けにする」という行為は、物事をより明確に観るために、分解して理解するための行為である。特に公務員等の公共セクターで働く人たちにとって、この能力は大事であり、多数のドキュメントを短くメモにまとめる能力が要求される。このまとめるという能力は、就職してから必要になる能力である。「まとめる」はある意味表面的だが、「整理する」は組織構造が内在している必要がある。

Q2) K7)

フランス語や哲学の作文を通して、諸外国などと比べてフランス人の論理的な思考力や表現力の育成はどの程度成果を上げているのでしょうか。

A2)

一番大事なことは「考える」ということである。考えることを学ぶためには、高校で特に二つの形の練習をしている。その一つがディセルタシオン(小論文)であり、もう一つがコンポゼである。後者は複合的注釈とでも言うのか、これは幾つかの構成があって、複数の文章を与えられてそれに対して注釈を行うという練習である。しかもそれが構成されている(構造を持って記述されているの意か)ことが求められる。前者のディセルタシオンについては、一つのアイデアや質問から、自由に議論することを通して考えることを体得させている。

注釈は問題文に即している必要がある。私はそれをスペインの詩人から学んだ。日本語を学んでいる時に夏目漱石の三四郎の注釈や永井荷風のものを読んでいたときに気付いた。注釈は最初に全体的な印象について述べ、その後に全体の構成を予告するという作業である。先ほどお渡しした「沼」の解説書はまさにこの複合的注釈の例である。

文章自体は日本語で2ページほどであるが、これを日本語に訳す必要がある。大学の3年生の時の課題であった。特に大事なことはその細部に注意を払うということである。

この注釈の配点比率だが、10点が翻訳に、そしてもう10点が注釈を評価され20点満点で採点される。

注釈に関して重要な練習は、対象とする作品は文学のものであるが、他の芸術の分野と関連付ける、結び付ける、あるいはほのめかすとかそういうことを行うことも行われる。例えば永井荷風の作品では私は絵画、つまり、木の描写を通じて絵画との結び付きを論じたり、三四郎の時は演劇との結び付きについて論じた。これらは義務ではないが、このような行為を通して、テキストをより良く分析することができるようになる。

表現力と思考力はより深く考えることによって上達する。感情を表す時には言葉がなければ表現できないように(言葉があって感情があるわけではなく)、表現力には思考力が必要である。

Q3) H2)

フランスにおいて「整った文章」を書くにはどのような訓練が必要であると考えておられますか。

A3)

小学校から順に定常的に練習をすることで習得することができる。その練習の文章も次第に長くする、もしくは複雑にすることに依って上達する。

大学の段階でも練習は続けるが、大学の段階では書けるようになっておくことが求められる。知人(フランス人)の例からも母語(フランス語)を書けるようになっていないと学習に影響が出る(場合によっては進級できない)。

書くための練習に一番寄与するのは、宿題の添削である。集団的な添削も、個人的な添削もある。集団的な添削とは、教室全体に対して語彙の選択の助言、生徒同士で直させる、繰り返し文や一文が長過ぎる等の指摘を行うことである。添削を受けた後に、段落を書き直させて再提出させる。

Q4) H3)

何歳ごろ、あるいはどの学校の段階で、作文の技術を学ばせるのが一番良いとお考えでしょうか。

A4)

文章を書かせることは大切である。国民教育省が1996年の改革において、議論できることの目的は「市民性(?)を育てること」としていた。議論するには論に適した表現方法や根拠等を知っておく必要がある。中学生の最終段階までに議論することができるように習得させたい。

実際のところ、高校でも古代から18世紀、現代までの文学作品を使って継続的に勉強させる。高校2年のバカロレアには古代・18世紀、19世紀、20世紀の文学作品が教材として出されるので、高校2年生までに習得させたいと考えている。フランス語の教材の年代と、歴史の教材の年代をリンクさせて進めている等の工夫をしている。

日本に当てはめると、なかなか実現は難しいのではないかと。1年生ではギリシャとローマについて現代語訳にして教材にしている。古代から始める理由は国民教育省の方針だから。教材には、物語と演劇と詩がある。これらは教養の基礎的な要素であるとの考えがある。何れも難しい課題ではあるが、生徒は興味を持って勉強してくれている。歴史・地理の先生とフランス語の先生がコミュニケーションを取って授業を進めていた(ビビアン先生の場合)。

先生の個性が授業に反映しているように思う。教員集団の質が教育の質にリンクしているように感じる。「教える」ではなく「伝える」という精神で教育をしている。

Q5) H4)

フランスでは哲学やフランス語の授業で作文の「型」を教え、それに基づいて文章を書かないといけないと聞いています。この教育がフランスの高校生の「作文技術の向上」に貢献していると思われませんか。もしこの授業が無くなると作文技術は低下すると考えておられますか。

A5)

確かに「型」を教えている。作品(例えばレミゼラブル)を読んで、その作品の絵画も観る等や、他の英雄の作品も観る。これらを通して「論を立てる」訓練をする。そののち、文章を書く、もしくは口頭で述べる行為をさせる。「型を教える」ことは必須ではないが、描写方法を伝える、真似するためには有効な手法である。

ビビアン先生ご自身が子供の頃は作文だけは苦手だった(成績が悪かった)。中学校3年生のときにたくさん本を読むようになり、読んだ本の文章表現を真似て書いてみるようになってから成績が上がった。その経験からサン＝テグジュペリのように書こうと考えるようになり上達した。

「読む」活動の後に「書く」という活動を教えるのが一般的だが、逆の手順、つまり「書く」活動ののちに「読む」活動を行う手法で教えたこともあった。文章の最初の部分と最後の部分を提示し、中間部分を書かせる練習をさせた。場合によっては、最初と最後で関係が矛盾しているような設定にもした。書かせた後で、模範例を示して学習させたりもした。

教え方は教員の裁量になっている。教育効果の到達点(目的)は示されているが、教え方(方法)については縛りが無い。教員ごとの教え方のバラツキはそれほど大きくはないと感じている。

中学校の先生のステータスは普通である(それほど高いわけではない)。ご自身は二十歳の時に山間の学校に赴任した。1968年(学生運動が盛んになった年)までは先生に対する敬意があった。しかし、現在はそうではない。

「型」が唯一の方法だとは思っていないが、有効な手法だと思われる。「真似をすること」の一つとして「型」がある。

真似の対象(例: サン＝テグジュペリ)を見つけきれた人ばかりではないのではないかと? 動機付けを持たない子どもはどうなるのか? との問いに対して、難しいでしょうねとのこと。社会学の話になるが、家庭の状況や地域の貧富にも依存するだろう。

能力別クラスで教育を行っている。

論理的に記述できる能力を有している人の割合は、難しい問題である。学校が合わないという層が一定程度いるのも事実である。

<鈴木>

冒頭と最後を設定して中間部分を書かせるのは、指導がし易いのではないかと。子供に真似したいという作品に出会わせるような指導を先生がされたのではないかと。

教員の能力もあるが、図書館も重要である。学校教育が自分を育ててくれたと感じている。

子供にいろいろな人物像を提示できる能力を持った教員、引き出せる教員が望ましい。作家だけでなく広告、雑誌、投書欄等を題材にすることが提言されている。

<鈴木>

いろいろな題材から教材が採用されている。「市民を育成するための力として議論できる力を付けさせる」という思想があることが、日本とは異なると感じた。

「意見を表明することが重要であること」を教える。高校の最後の1年間にしか哲学教育が入っていないのは残念なことである。哲学固有の概念もあるので、1年間だけでは短か過ぎる。

フランスの中学生の中にも意見を言う子もいるが、一方で言わない子もいる(全員が意見を言うわけではない)。

教育のトレンドとしては、年々勉強しなくなっているように感じる。中には勉強自身を拒否する子供も現れている。能力の問題ではなく、態度の問題であると感じている。地域の特性もあるが田舎の方が勉強に熱心なように感じる。

デジタル技術の発展が教育を阻害している面もあるのではないかと。